ISSN 0914-8620

ヒマラヤ学誌

第19号

目　次

巻頭言 …… 編集委員

ブータン王女来学特集
ブータンの国民総幸福量―ブータン王女来学によせて― …… 松沢哲郎 2
ブータンの歴史、および日本との交流史 …… 熊谷誠慈 3
Learning from the Princess of Bhutan …… Miku Akiyama 6
ブータンと京都大学との友好60周年の記念事業についての報告 …… 坂本龍太 10
京大ブータン連携60周年記念行事ロジスティクス …… 松永倫紀ほか 23
Keynote Address by Her Royal Highness Princess Sonam Dechan Wangchuck at the Bhutan and Kyoto University 60th Anniversary Memorial Symposium …… 33

第4回アジア・太平洋登山医学会・最優秀表彰論文
Glucose Intolerance by Interaction between Hypoxia Adaptation and Lifestyle Change in Highlanders in Tibet Plateau …… Kiyohito Okumiya *et al.* 37

原著・翻訳
中央ブータンの守護尊・ケープ・ルンツェンの法要儀軌（翻訳編） …… 西田　愛ほか 49
ヒマラヤ高地、ラダーク地方における大麦食とその変化
―栄養成分と健康効果に着目して― …… 木村友美 60
ブータンの民主立憲君主制に対する批判の再考
―「現実の多元性」を踏まえた「意味のある価値評価」を目指して― …… 真崎克彦 73
インドネシア共和国パプア州ソロバ村の河川・湧水の水質調査 …… 太田守洋 82
ダニ族における歯科保健に関する調査 …… 吉本大治ほか 88
東ブータンにおける生業活動の変遷と社会における農村の現在地
―タシガン県カリン行政区ダウゾル集落の事例から― …… 赤松芳郎 95

雲南懇話会からの寄稿
栽培ソバの野生祖先種を求めて―栽培ソバは中国西南部三江地域で起原した― …… 大西近江 106
ランタン谷の雪崩堆積物と氷河変動、および災害地形について
―2017年春のネパール・ヒマラヤのフィールド・ノート― …… 伏見碩二 115
雲南省西双版納―少数民族と熱帯照葉樹林自然保護区2000kmの旅 …… 長谷川信美 124
播隆上人の槍ヶ岳開山と飛州新道―信州の鷹匠屋・中田又重と共に― …… 穂苅康治 136

紀行・エッセー・感想文
「中国・青海大学との国際交流の取り組みについて」東京女子医科大学東医療センターからの報告 石川元直 147
ラダークにはなぜうつ病が少ないのか―ラダークから学ぶ　こころの処方箋― …… 高岡正和 152
現地調査は何のため？―ドムカル村ガイドブックの出版― …… 山口哲由 160
Ladakh自転車旅行記 …… 竜野真維 167
ブータン産婦人科診療、土佐健診から発想を得た、フィールド医学研究計画 …… 加藤恵美子 174
キルギスにおけるユキヒョウ研究の試み …… 菊地デイル万次郎ほか 179
GNHを考えた旅―京都大学ILASセミナー「ブータンの農村に学ぶ発展のあり方」
2016年度現地スタディーツアー参加者の覚書報告集― …… 安藤和雄ほか 185
地域在住高齢者に関するフィールド医学実習―平成29年度参加者による報告集― …… 坂本龍太ほか 214

2018
京都大学ヒマラヤ研究会
京都大学霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院
京都大学ヒマラヤ研究ユニット

ヒマラヤ学誌　*No.19, 185-213, 2018*

GNHを考えた旅
—京都大学ILASセミナー「ブータンの農村に学ぶ発展のあり方」2016年度現地スタディーツアー参加者の覚書報告集—

安藤和雄[1)]，平田二千翔[2)]，中村将志[3)]，阿部梨奈[4)]，高柳志帆[5)]，柏木真穂[6)]，門間ゆきの[7)]，岡　和來[6)]，坂本龍太[1)]

1）京都大学東南アジア地域研究研究所
2）京都大学農学部
3）京都大学工学部
4）京都大学教育学部
5）京都大学法学部
6）京都大学医学部
7）京都大学総合人間学部

本報告集は帰国後の半年後に作成されたことから、フィールドワークの熱気が静まった境地で各個別報告書が書かれている。しかし、各個別報告が一編の報告集となることでフィールドワークの現場での感性がよみがえり熱気が再び湧いてくることを期待し、本報告集が作成された。スタディーツアーは2017年2月27日～3月16日ILASの国際交流科目「ブータンの農村に学ぶ発展のあり方」の一環として、東ブータンのタシガン県に立地するブータン王立大学シェラブツェ・カレッジが受け入れとなり実施された。京都大学学生7名、教員2名の計9名が参加した。本年度のスタディーツアーは、2014、15年度の実施経験から、実施時期を雨期の終わり9月から乾期の3月に変更し、主目的は、①過疎・農業離れ（栽培放棄地）の問題の現状やBasic Health Unit（BHU：保健所）などの活動を学ぶ、②参加型地域研究としてのフィールドワークの実践的入門実習を行う、③シェラブツェ・カレッジでの国際ワークショップInternational Workshop on "The Role of University in Promoting GNH through Practice, and Rural Development"（10th – 11th March 2017）へ参加する、④GNH実践プログラムとしてBhutan Youth Development Fundが支援するタホガンのガキ村、Samdrup Jongkhar Initiativeが支援するメンチャリ村を訪問し、GNHを相対化する、⑤民族の多様性理解のために高地牧畜民ブロッパの住むメラ村を訪問することであった。方法論として、毎日の現場での見聞の事実を第1、2、3位と順位をつけてキーワードをつけて記録し、その事実をとりあげた理由を明記した。本報告集はそれらの事実記録にもとづく覚書集である。各個別報告に議論されているように、スタディーツアーの目的は十分に達成されたといえよう。以下、掲載個別報告である。1. はじめに—2016年度ILASセミナー「ブータンの農村に学ぶ発展のあり方」の従来との変更点、目的、教訓、フィールドワークの印象日記—（安藤和雄）、2. 現地を知ること、現地で知ること（平田二千翔）、3. 刺激に満ちた初の海外渡航（中村将志）、4. 幸せとブータン（阿部梨奈）、5. ブータンの今（高柳志帆）、6. 学生と医者の狭間から見たブータン（柏木真穂）、7. 幸せへの道中（門間ゆきの）、8. 私が感じたブータン（岡和來）、9. おわりに—雪—（坂本龍太）

キーワード：ブータン、参加型地域研究

1. はじめに
—2016年度 ILASセミナー「ブータンの農村に学ぶ発展のあり方」の従来との変更点、目的、教訓、フィールドワークの印象日記—

東南アジア地域研究研究所実践型地域研究推進室
室長（准教授） 安藤和雄

(1) フィールドワーク実施時期の変更

2016 年度のスタディーツアーは、2014、15 年度に比べて、大きな変更点がある。それは、2014、15 年度の経験から、8 月末から 9 月中旬の雨期の終わりから 2 月末から 3 月中旬にスタディーツアー実施時期を変更したことである。9 月に入れば、例年であれば東ブータンでもそろそろ雨があがるのであるが、2015 年の 9 月は雨が多く、フィールドワーク時にも雨に悩まされ、東ブータンのモンガルからトンサに向かう途中の山岳道路地帯で大規模な土砂崩れの現場に遭遇した。いつ何時こうした大規模な土砂崩れの被害にあっても不思議ではないことを懸念し、乾期に移すという判断を下した。京都大学の学生たちが冬季休暇に入る 12 月下旬の実施の可能性も考慮したが、山岳道路は標高 3750m のトゥムシン峠（写真 1）を越えなければならず、極寒の 12 月末では雪により峠道が閉鎖される可能性があり、学生たちが体調を崩しやすいので、2 月末から 3 月中旬の 2 月 27 日～3 月 16 日に実施した。しかし、2017 年 3 月には数年～数十年に一度あるかどうかという季節外れの大雪が降り、トゥムシンの峠道が数日間閉鎖されてしまった。ブータン国内の移動問題は、南北の幹線道路は整備されているが、東西、とくにタシガンからティンプーの主要国道はトゥムシン峠を越える一本のみであり、タシガンから整備された舗装道路を使ってティンプーにいくためには、この峠越えの道路を使うか、アッサムに一度出てインド国内をプンツォリンまで移動して、ティンプーに入る道路しかない。外国人である私たちは、インドビザとブータンのダブルエントリービザがなければアッサムルートは使用できないのである。私たちがとった道路は一般道ではなく未舗装の山道であり、通常であれば旅行者は使えない道路であったが、カウンターパートであるブータン王立大学シェラブツチェ校 Sherubtse College の学長らの迅速な政府関係者への働きかけで、この道路を使用してなんとかパロ空港を予定通り帰国の途につくことができたのである（2015 年 9 月の土砂崩れや 2017 年 3 月の大雪については本稿の坂本さんの報告に詳しい）。この経験により 2016 年度のスタディーツアーは私や参加者に一層忘れがたいものとなった。そしてブータンの開発問題を考える上で、移動の問題が大きく影を落としていることも実感として再認識できた。一方で、この緊急措置のおかげで、私はブータンとアッサムの国境周辺に広がるドアール地方（Duar）と呼ばれる平坦な氾濫地形を見ることができた。ドアール地方はボド族のゲリラ活動などで今も治安が不安視されていることもあるが、山岳地形のブータンにおいて、ネパール系の人たちが多数派となって住む平坦な地形が比較的多い南部地域には大きな発展の可能性があることを肌で感じることができた。

(2) 目的—フィールドワークでブータンを知りGNH の活動現場を訪問する—

2017 年度のスタディーツアーは、従来の過疎・農業離れ（栽培放棄地）の問題の現状や Basic Health Unit（BHU：保健所）などの活動を学ぶ参加型地域研究としてのフィールドワークの実践的入門である。そして、その主目的は、シェラブツェ・カレッジでの国際ワークショップ International Workshop on "The Role of University in Promoting GNH through Practice, and Rural Development"（10th － 11th March 2017、New Conference Hall, Sherubtse College）に参加し、ワークショップのテーマである国民総幸福量 GNH の実践的プログラムの可能性を考えることにあったので、GNH という理念をプログラムの形にしている NGO の活動の現場を実際に訪れ、そこで学ぶことで GNH を相対化することにした。また、標高が 1500 ～ 2500m にすむ東ブータンの多数派である農耕を主な生業とするシャチョッパ Sharchokpa の人たち以外の民族の存在を知るために、今回は標高 3000m に集落をつくりヤク、ヤギ、高地牛、ヤクと高地牛とのハイブリッドであるゾー、ゾモの放牧を生業とするブロッパ Brokpa の人たちをメラの村に訪ねた。

(3) 教訓とフィールドワークの印象日記

フィールドワークの記録のつけ方として、昨年同様、今年度も印象に残った事実（見たこと、聞いたことなど）を優先順位1、2、3位として記述し、それらをキーワード、事実、理由という枠組みでまとめてもらう作業を毎日行うように学生たちに依頼した。そして、関空に到着した日に、帰国のフロアと昼食の店において、各自の全体の感想を述べてもらい、それを検討した。

スタディーツアーからの帰国が3月16日であった。すぐに原稿を集めればよかったのであるが、のびのびとなり、約6ケ月後の9月の始めに原稿を集めたという経緯もあり、参加学生たちの原稿は、現場から帰国した時の検討会で垣間見せてくれたフィールドワークで受けたインパクトからくる熱気は冷え、経験を冷静に対象化している。冷静な論理が「常識」をつくるとすれば、感性の熱気は「個性」であり、現実の壁をこじ開けていくのは「個性」であると考えている私は、時間が空いてしまったことに残念な気がしている。帰国後時間をおかずに原稿書きに参加者の皆さんを向かわせることができていたならば、と責任を感じている。恐らく、本報告書を手にした参加学生の皆さんは一読された時に、きっと、自分が書いた原稿であるにもかかわらず、ある種の違和感を覚えることになるかもしれない。それは、自分の中に埋め込んでいたあの時の熱気が体内で動いたからだろう。熱気のエネルギーは決して消え去ったのではなく、眠ってしまったのである。将来、参加者が「あの時」の熱気を目覚めさせるためにも本報告書がマイルストーンとして必要である。その目的を明確にするために、「覚書」というタイトルを今回の報告集にはつけた。「鉄は熱いうちに打て」という格言があるように、現場での個人が見聞きした事実を直感という個性で記録し、それを分析することで直観力をたかめていくことができる。直観力をたかめていくためには個性を動かす熱気というエネルギーが必要である。なぜなら直観はたえず客観という常識に対峙しつつ感性に依拠しつつ個性を引き出すからである。私が提唱している実践型地域研究の「実践型」という言葉にはこの思いが込められている。まさに「鉄は熱いうちに打て」の格言どおり、現場での地道な記録にへばりついている感性の熱気が冷めないうちに、文章化作業という分析行為を通じて個性と常識が格闘することで、直観力が鍛えられていくのである。熱気が冷めてしまった、冷静を取り戻した時点での文章化作業は、常識が個性に優位をしめながらの作業を推し進めることになっているのではないか、と私自身反省している。現場で記録することと同様に、現場を離れてから、時間をおかずに記録を対象化する作業に入ること、これが方法論的にも大変重要だったのである。このことを私は本報告書をまとめていく過程で再確認できた。今後の教訓である。常識的な見方の壁をやぶるのは個性である。それが新しい論理を生み出す原動力となっていく。参加者の皆さんには、本報告集を手に取って、フィールドワークが体内に植え付けた熱気を目覚めさせ、フィールドワークでの見聞の事実と経験を今一度振り返ってもらいたい。できればそれをまた文章化しておいてほしい。そうすることで直観力を確実に鍛えていけるのである。このことも実感してもらいたい。フィールドワークは現在進行形で止むことはないのである。

私は参加学生の皆さんにお願いした毎日の記録を私もつけていた。その中で、今回特に焦点を置いたGNH関連の実践活動をするNGOの現場を訪問した日とメラの訪問日の日記について、以下に記する。こうした事実の記録方法は研究者などの専門家でなくても誰もがその気になれば実践できる。私が提唱しているフィールドでの記録の仕方の事例を示しておく。本報告書に寄せられた覚書は、出発点は各自のこうした事実の記録が土台となっているのである。

(4) フィールド日記の事例（安藤のフィールドノートより）

2017年3月1日　GNH村 Gakidh Village の訪問

今朝は8:50に前学長のPema Thinleyさんの自宅を表敬した。そして、Youth Development Officeを紹介してもらい、GNHの実践をしている村Talhogangにでかける準備をして、9:45にブータン王立大学学長を学生たちと表敬した。11:45に保健省を表敬し、15:00にYouth Development OfficeからTenzinさんがガイドとして同行した。16:00に村を出て、RobesaのVaraホテルに入った。18:00から食事。ThimphuのホテルはHotel 89で、

朝 6:00 頃の部屋の中での気温は 16℃だったが、18:00 頃の Robesa の気温は 18℃くらいある。明日は 5:00 出発する予定。

第 1 位　キーワード　Bhutan Youth Development Fund の GNH 活動
事実）Gakidh Village での活動視察。Thimphu から約 1 時間半の Punakha Dzongkhag（Punakha 県）の Talhogang 村（標高 1863m）の村では、2014 年度から、Aide et Action というフランスの団体の支援　で、「Empowerment of Rural Youth Through Livelihood Skills」というプロジェクトを行っている。My Gakidh Village（私の幸福な村）をつくっている。Baseline/Feasibility Assessment、Capacity Building の Phase を終えて Implementation and Monitoring のフェーズに入っている。すでに 25 名の若者を街から呼び戻しているという。
理由）GNH の具体的なプログラムをこれまで見聞することがなかったが、前のブータン王立大学の総長から話を聞いていたのでぜひ訪問してみたかった。それが実現したこと。そして、やっていることはバングラデシュなどの農村開発プログラムとかわらないが、目標を若者の村へのつなぎとめにしっかりと定めていること。My Gakdih Village というコンセプトが GNH 的である。

第 2 位　キーワード　Bhutan の若者の農村からの流失
事実）2014 年にすでに Punakha 県という東ブータンの Trashigang 県からすれば「都会」の地域でもかなり深刻にこの問題が起きているという事実に驚いた。
理由）NGO がすでに 2014 年時点で若者の都市への移住問題を認識して対策を講じていたということ。Aide et Action もしっかりとした支援を行っている。

第 3 位　キーワード　村の棚田の風景
事実）Thimphu からドチュ峠を越えて、Lobesa への国道（ハイウエー）の農道を 3㎞くらいいったところには、桃源郷のような棚田の集落が広がっていて、ちょうど、七曲りの土の坂道には、赤花や白花のシャクナゲの木がところどころにあり、コブシの白い花も咲いていた。道路のふちには名前の知らない紫色の花を咲かせていた草本の群落があった。棚田には麦だろうと思うが裏作が栽培されていた。
理由）国道をそれて数十分で桃源郷のような棚田の村の風景が広がっていた。生活することには苦労もあるだろうが、村の景観の美しさは東ブータンでもなかなかみることができないほど。谷に広がる棚田村のひっそりとしたたた住まいにはブータンらしい落ち着きを感じた。こんなところでも「過疎の問題」が起きている（写真 2）。

2017 年 3 月 5 日メラックの村訪問
　朝 7:30 に出発して、途中ラディ・ラカン（ラディ寺）を見学し、山道をボレロと呼ばれるインド製のジープ型のピックアップ 4 台でブロッパ（牧畜民）の住む標高 3600m のメラ村に 12:15 頃に到着し、15:30 メラ発、19:00 頃にラディ村の宿舎に到着した。以下印象である。

第 1 位　キーワード　沈丁花
事実）2200m 標高くらいかシャクナゲに交じり道端に小さな白い花が沢山咲いている風景がでてくるようになった。それが 2600m でピークに達し、その後 2800m くらいまでつづいた。同行している名誉教授で森林生態が専門の山田名誉教授から沈丁花と教えてもらった。たしかに、近くで見ると沈丁花の花であった。鴨川沿いでも春になると強い臭いを出しているのを観察している。中尾佐助の「秘境ブータン」にはこれを紙漉きに使っていると記述されているとも教えてもらった。現地語の東のシャチョッパ語では Shung Shin（シュッグ・シン）、ゾンカ語で De Shin（デ・シン）、意味は紙の木という。これはシャチョッパの同行旅行代理店主カルマから聞いた。照葉樹林の林の切り開かれたところや、常緑のカシが枝を払われて太陽の光が入るところに群生していることもあった。沈丁花とともにコウゾミツマタもあったが花は咲いていなかった。コウゾミツマタは Sengor の近くで栽培されていることは知っていた。紙漉きの材料である。
理由）東ブータンに通っているが、初めて知った事実である。これまで見過ごしていたのかもしれない。照葉樹林のギャップのようなところに現れているのが面白かった。

第2位　キーワード　荒れた照葉樹林
事実）2600mくらいの森林で、山田さんが「荒れている」ということを言った。照葉樹林が荒れているということである。この場所でブロッパの人が一人、恐らくヤギの毛皮のチョッキと長靴ででてきた。またゾウ（またはゾー）も見た。木々は照葉樹林のカシが多く、そのカシは不自然に枝が切られていた。これを学生が山田さんがローソク型の木と言っていたという。たしかに樹勢をよく表している。日本の照葉樹林文化論では、納豆や稲などばかりが強調されるが、私は照葉樹林こそは乾季、冬の飼い葉利用が一番大きいと思っている。ゾー・ゾモや牛はヤクのように冬場に搾乳をやめる時期をつくらずに、一年中搾乳するとブロッパから私は聞いている。そのために、冬場は寒さということもあるが、2000mから2600mくらいの標高の照葉樹林の森の開けた場所にブロッパは移動して、ほぼ11月～3月くらいをそこで過ごす。この時ヤクは3000mの枯れた草原に放牧される。夏場はゾー・ゾモ、牛は冬のヤクの草原に上げられて、ヤクは4000mの草原に上げられる。夏場はゾー・ゾモ、牛、ヤクは草が主食となる。冬場はゾー、ゾモ、牛は飼い葉（照葉樹林の緑の葉）、下草、ヤクは枯草や低い竹株の小さな葉が主食となる。写真が荒れた森（写真3、白い花は沈丁花）。
理由）山田さんのキーワードから発想した「荒れた照葉樹林」という表現を気に入っている。森林は利用すれば荒れることもあり、その攪乱はこの森林が長年ブロッパに利用されてきた証である。その攪乱のために沈丁花の花が多くみられる、下草が落葉樹の森林のように生えてくるのだろう。ブロッパは照葉樹林の常緑の木々の枝を切り落とし、林床に光を届かせることによって、林床での草の生育を促し、見事に常緑樹の森林を「豊かな森」に変えつつ牧畜と両立させているのだとも言える。

第3位　キーワード　ヤクのいる草原
事実）3000mくらいの尾根にあがると一気に視界が開ける。本来、ここはモミが生い茂る森林となるはずであるが、草原が広がっている。ところどころに森が残っている。パッチ状に草原が広がり、高度を増すごとに草原の比率が増していく。3500mにメラの村があるが、ここくらいまでは、ヤクが現在放牧されている。メラの村では家屋は集村でそのまわりには木はなく草原と岩塊流（氷期から間氷期の温暖な時に現れる斜面にでている。山の斜面の風化作用が活発になり、岩のかたまりが水で流されてできる：同行の岡山理科大学の宮本さんの話、自然地理専攻）がある。
理由）今回、ゾー、ゾモ、牛、ヤクの飼育場とその環境状況をシャクナゲ、沈丁花、照葉樹林、草原という組み合わせで明確に知ることができた。かなりシンプルで自然環境を崩さない程度に利用していることがよく理解できた。

2017年3月9日 Dewathang CTS ゲストハウスの朝「2017年3月8日の記録」

昨夜は22:00に就床し、今朝は4:30頃に起床し、PCに向かった。昨日訪問したSamdrup Jongkhar Initiative（SJI）のGNH VillageであるMenchari Village、Orong Gewog、Samdrup Jongkhar Dzongkhagの農業統計をしらべてみるためだ。昨日は、朝8:30頃にSJIの事務所でProgram Directorから話を聞いた。SJIはGNHの実践プログラムで名前が知れているCSO（Civil Society Organization）だ。そこから彼らのトップが行っている僧院を訪れ、12時ころにMenchari村に着いた。Menchari村へは国道から農道に入って下った。途中、土の道路が崩れて修理している箇所があったので、そこまでミニバスが入り（そこの標高は1300m）、そこからさらに下って、標高1060mの村の寺まで歩いた。途中、焼き畑をこれから行うと思われる畑を数枚みた。木や草が切られていて、干されていた。帰りが17:00頃となった。村の対面の斜面から煙があがっていた。同行してくれた僧院のプログラムを担当しているDr. Yanが焼き畑を焼く煙であることを教えてくれた。学生たちが陸でつながる国境を見たことがないというので、Dewathangから18km離れたSamdrup Jongkharのインド・アッサムとの国境であるブータンゲートを見せ、その帰りに、ホテルのレストランで夕食を食べ、大学のゲストハウスに戻った。以下2017年3月8日の記録である。

第1位　キーワード　モンパ Monpa 型犂
事実）Menchari村でのプログラムを終えて、山道

を上ってくると、焼いた畑で、二頭のジャチャに犂をひかせている現場に遭遇した。村へ同行してくれた Dr. Yan にぜひこの村の犂をみてみたいと頼んでいたので、彼が村人から聞いておいてくれたのである。現場では、大人３人で犂かけを、もう一人の女性が平ぐわで石や大きな土の塊、根っこなどを掘っていた。この村はもともと焼き畑村で、以前は、陸稲の Pan Bara もつくっていたが、今は陸稲もつくらず、もっぱら、ジャガイモ、唐辛子、生姜、野菜などをつくっているようである。焼き畑の休閑期間は３～５年と Dr. Yan は言っていた。政府は焼き畑をやめることを推奨している。ここの畑（常畑）は急斜面に立地していて、ほとんど焼き畑の立地とかわることがなく、ここの常畑が焼き畑からの転用であることがよくわかる。犂は Monpa 型の犂でまったくの無床犂であり、Ura から Mongar への途中、Limithang の棚田地帯でみた有床の犂とは形状が異なるが、Monpa 犂から Limithang の犂への変化は柄のカーブのつけ方だけであることがよくわかる（写真 4）。ここは今からジャガイモの栽培をするという。木（恐らく常緑の固いカシの木）の犂先である。Khaling からの途中にある Wamrong が出身の Dr. Yan が父から聞いた話として、木の犂先を使うのは、木の犂先は頻繁に交換することが必要で、その時に牛を休ませるためもある、とのことであった。Menchari 村では、くびきを Nya Shin（ニャシン、シンは木という意味）、練木と犂身・犂柄・犂先の一体を Chuk Shin（チュック　シン）と呼んでいる。Dr. Yan の出身地では、練木を Chuk Shin、犂身などを Languri と呼ぶ（確かでないのでもう一度確認すること）。Dr. Yan の話では、彼の出身地（同じ東ブータンで Wamrong は Trashingang 県）では犂をいまから入れることを Un Tare（ウン・タレ：ウンは耕地のこと）、犂を入れていることを Un Tancha（ウン・タンチャ）と言っていると教えてくれた。

理由）Monpa 犂の東ブータンでの使用は、Sakteng のコックの Leki のブロッパの村、シャチョッパの人では Radhi 村でもっとも古くは使われていたことを確認しているが、南部での確認は今回がはじめてであり、焼き畑から常畑が斜面畑となり、そこに使うためにこの形の犂が利用されはじめたという私の仮説を十分に裏付ける事実を確認することができた。

第２位　キーワード　伝統の継承

事実）Menchari 村では現在政府が木材を提供することで、伝統的な家屋から新しいタイプの家屋に代わっている。新しい家屋は Bhutan 型ともいえる、石積みの上にトタンと木造である。伝統的家屋は高床でバナナの葉で屋根がふかれている。しかし、ブータンの一般的な石積みの伝統家屋では、石積みは平な基壇をつくってその上に作られるが、ここでは、高床式であるので、家屋のたつ土地は整地されることなく斜面のままで石積みがされるのである。斜面畑と同じであり、大変興味深かった。

理由）伝統文化は新しい文化を入れる場合でも、どこかに必ずその痕跡を残す大変よい事例だと思う。

第３位　キーワード　SJI の活動

事実）SJI は 2010 年に Dzongsar Jamyang Khyentse Rinpoche という名前の僧によって開始された。Rinpoche であるので偉い僧の生まれかわりである。Gakidh Approach と異なるのは、Gakidh 村のターゲットが若者の都市への移動をいかに食い止めるかにあったが、SJI は村人全体、GNH を全面にだしたトータルアプローチとなっていることを Program Director が説明した。SJI が有名になったのは、Anti-Corruption Commission の前の Chairperson で不正を厳しく摘発した功績により女性で初めて赤のスカーフを現国王から贈られた方が長になったことも関係している。いつ贈られたか年は聞いていない。8:45 頃から話をしてくれたのは、Program Director の Sonam Sorin さん（男性）、Program Officer の Chenu さんです。CSO（Civil Society Organization）と言われている。全国に 50 ある。SJI 以外はすべて首都 Thimphu で活動している。これを捉えて、Program Director は GNH in Thimphu と呼んだ。これが大変好評となる。SJI の事業は、6 つある。① Organic Agriculture、② Zero Waste、③ Lho Mon Education（僧院での若者僧の一般教育）、④ GNH Model Village（現在 1 つ、Menchari 村のみ）、⑤ SJI Village（20 エーカーの土地に訪問者に SJI の成果を見せるためのデモンストレーション村、現在 1 つ、インドのガンディ・アシュラムに似る）。⑥ Traditional Seed Bank（こ

れは、現在、野菜の種子などはすべてといっていいほど雑種強勢F1を使った品種となっているので、農家が採種できない。それを農家が採種できるようにしたプログラムである)。2010年に開始される。ファンドは、カナダからのIDRC(International Development Research Centre)のNGOと国内ではCSOFF(Civil Society Organization Fund Facility)から支援を受けた。Fundingが現在もっとも大きな問題。常勤給料をもらっているスタッフはProgram DirectorとProgram Officer、事務2名、教育関係の5名、GNH村は2015年に開始、23世帯116人口、GNH村の特徴はCommunity、Internalization、Software Approach、SJI村はSustainabilityが目的。2016年12月に他の21のCSOと一緒に国王からGold Medalが活動に対して贈られる。僧院はCGI(Chokyi Gyatso Institute)。1968年頃まではインド軍の駐留地であったところに、1974年に小さな寺をつくり、2004年に新しい今の僧院となる。代表はSJIの代表と同じで、この代表は映画監督もしている。学生僧がカナダからの女性の先生に環境問題の講義を英語で受けていたところを見学する。Dewathangの街から12㎞離れたMenchari村に行く、途中、デイゴの赤い花が咲いているのを見る。国道から農道に入り、1300mで車をおりて、約300m下って、Menchari村の寺に到着し、村人の歓迎を受け、寺の中で昼食と説明を受ける。Zero Wasteなので、バナナの葉のコップ、皿で食事をする。Program Officerから説明を受ける。彼は2016年にSherubtse大学を卒業してSJIに就職する。ここに今から15ケ月前にCollege to FarmというSJIのProgramで、ブータン王立大学のGedu College(9人)、CNR(2人)、Sherubtse大学(2人、Karma Dewan)、43日間住んだ。政府の普及機関などとリンクする。Farm Roadを2016年11月17日に作り始め、これが大変地域の評判となる。4世帯しかない近くの村まではすでに農道がきていたので村人は不満をもっていた。この村の問題は、①アルコール中毒、90%くらいの村人(男子、女子と子供も)がアルコールを常習。道路工事、家の建築などの日雇い仕事一日1000Nuのうち、家計に200～300Nu使う以外、大体500Nuくらいを近くのマーケットでビールやラム(ウイスキー)に費やし飲んでいた。朝から酔っぱらっていることも珍しくなかった。6ケ月間で30%減少。②衛生問題。トイレがなかった。1年間政府が努力してもできなかったトイレを、1ケ月でつくる。コンクリート、便器などを政府が出して、労働力だけは自前で。③家計簿をつけさせ、Bhutan Development Bankに17口座をつくらせた。④栄養関係のAwareness。この村では毎月10、15、30日は畑仕事をしない、その時に地域の僧(在家か出家かわからないが多分在家)が来てPuja(儀礼)をする。不殺生戒をまもるため。この地域は昨年くらいから豚を買っていない。鶏の卵を肉のかわりに食べる。不殺生戒を守るため。この村では今はほとんどの人が酒をやめた。これも僧の影響。これはSJIの代表がこの村にきて説法をしたことによる。酒をやめたことで、この村の団結力ができ、リーダーも生まれた。SJIが最初にこの村にコンタクトした時には7名のみでてきた。その人たちも酒を飲んでいた。酒は団結力をよわめる。今はリーダーも選挙で選ばれる(Tsogpaのこと)。また、豚を飼うことを止めるように推奨している。お寺は3年前にGewogの町役場から80000Nuの支援を受け、地域から残りの寄付を受けて作る。College to Farmのプログラムでは2016年度は、インターンとして学生を受け入れている。Program Officerは2015年度の受け入れ学生だった。

理由)SJIの活動については、私たちがバングラデシュにおいてJICAで農村開発事業をした時と大変よく似たアプローチをしているが、アルコール問題や焼き畑民の文化である豚肉を食べることを止めたなどは代表の僧への尊敬に負うところが大きい。College to Farmは大変参考になるプログラムである。

以上がスタディーツアー時に、ほぼ毎日、早朝に起床して食事前の数時間を利用してノートパソコンに向かっていつもまとめておいたフィールドノートである。これをもととして直観的な分析を試みる必要があるが、残念ながら私もこの時の熱が冷めてしまっている。現場の感性がつかんだ記録であるフィールドノートに写真を組み込むことで自分自身のデーターベースをつくっておくことは可能であり、それは時間がたっても決して色あせることはないだろう。フィールドワークを志す

人たちの一つの参考になればと思う。

(5) 参加型地域研究としてのスタディーツアー

経済発展のグローバル化に伴い、ブータン、中でも東ブータンの過疎・離農問題は年々深刻さを増している。アジア諸国においても同様な傾向が読み取れ、もはや一国、一地域が抱える問題というよりは世界が取り組まなければならないグローバル問題群の一つとなっているのである。この問題とアジアでもっとも早くから向かい合ってきた日本の果たすべき役割は決して小さくはない。しかし、残念ながら日本においても状況は悪化するばかりで、対策の決め手がないのである。経済偏重の開発の限界が過疎・離農問題に示されているといっても過言ではないだろう。こうした背景で現国王夫妻が 2011 年に東日本大震災のお見舞いで来日されると、ブータンブームが日本で起きるともに、閉塞感がただよっていた過疎・離農問題で悩む日本の中間山村地域ではブータンの国民総幸福量（Gross National Happiness, GNH）が経済開発にかわる開発理念として大歓迎された。GNH の理念が先走りしがちであるが、大切なことは理念に裏打ちされた実践である。今回のスタディーツアーの参加学生たちへの願いは GNH がなぜ魅力的なのかをぜひ実感し、過疎・離農の問題に対する当事者的意識が参加者に自覚的に芽生えてほしいという思いと、ブータンの人たちと時間と空間を共有することでブータンに直接触れてもらいたかった。そして、現場の実感を重視するフィールドワークを手法とすることで、興味のある人々誰もが行える参加型地域研究という「開かれた専門的営み」があることをぜひとも知ってもらいたいという願いでスタディーツアーが企画された。フィールドワークを通じてブータンの自然や人々の生業、NGO の活動を体感し GNH を相対化するという今回のスタディーツアーの主目的は参加学生の皆さんの報告から私は十分に果たしえたと私は自負している。実費参加してくれた学生、ILAS の国際交流科目 担当関係者、教職員、業務旅行株式会社関係者、シェラブツェ・カレッジ、カリン、ラディの行政村、関係 NGO の皆さん、村長、他の住民の方々、現地旅行代理など、今回のスタディーツアーを支え、お世話いただいた皆さん、また、本報告の掲載の機会を与えてくださったヒマラヤ学誌の編集委員会に記して感謝したい。

(6) 日程

スタディーツアー・スケジュール（2017 年）

- 2 月 27 日（月）TG673 便で大阪－バンコク（スワンナプーム空港）（バレンタインホテル）
- 2 月 28 日（火）B3 701 便でバンコク－パロ、パロ－ティンプー（HOTEL 89） 9:55 にパロに到着し、ティンプーへミニバスで移動。11:50 にティンプー中央病院に到着し見学。13:00 にホテル 89 にて昼食。その後はクエンセル・ポダン（大仏）とタシチョゾンを見学し、民族衣装のゴとキラを購入する。
- 3 月 1 日（水）ティンプー－ロベサ（VARA HOTEL） ブータン王立大学前総長と現総長に面会する。Youth Development Center その後 Ministry of Health へ移動し、昼食を頂く。15:00 頃タホガンのガキ村に到着し、見学。17:00 頃 College of Natural Resources に立ち寄る。
- 3 月 2 日（木）ロベサ－ブムタン（TASHI-RABTEN-HOTEL） 5:20 に出発。ワンデ・ポダンのドゥンドゥゲ村で朝食。トンサ村にて昼食。17:37 にウラ村に到着。
- 3 月 3 日（金）ブムタン－カンルン（ゲストハウス） 6:20 に出発。8:08 にトゥムシン峠（3750m）を通過。センゴルにて朝食。モンガルのヤディにて昼食。19:20 にタシガンにて夕食。21:30 にカンルンの Sherubtse College のゲストハウスに到着。
- 3 月 4 日（土）カンルン－ラディ（コミュニティーホール） 8:15 にカンルンの小学校に到着。朝礼と授業を見学。歩いてシェラブツェ・カレッジへ移動し、セレモニーに参加。シェラブツェ学生が伝統的なダンスを披露。食堂にて昼食。15:23 に出発し、17:42 にラディに到着。
- 3 月 5 日（日）ラディ－メラ－ラディ（コミュニティーホール） 7:30 に出発。ゲンゴックで昼食。13:30 にメラ到着。アマジョモ伝説を学び、家を見学。15:30 に出発し、18:35 にラディ到着。
- 3 月 6 日（月）ラディ－カンルン（ゲストハウス）
  7 人中 4 人が体調不良となり、残りの学生で BHU を見学へ。14:30 にラディを出発し、16:40 にカンルンのシェラブツェ・カレッジのゲストハウスに到着。

・3月7日（火）カンルン－デワタン（ゲストハウス） 7:30に出発。15:30にデワタンのJigme Namgyel Engineering College（JNEC）ゲストハウスに到着。
・3月8日（水）デワタン－サンドゥップジョンカル－デワタン（ゲストハウス） 8:20に出発。Samdrup Jongkhar Initiativeのオフィス、僧院と学校を見学。バスと徒歩で移動し、12:50にメンチャリ村到着。15:40に村を出て山を登り、16:45に出発。18:00にサンドゥップジョンカルにおけるインド国境ゲートを見学。18:30にサンドゥップジョンカル付近のレストランで夕食。21:15にデワタンのゲストハウスに戻る。
・3月9日（木）デワタン－カリン－カンルン（ゲストハウス） 8:10に出発。11:30にウォムロンにて昼食。13:40にカリンのBHUに到着し見学。National Handloom Development Centerで買い物した後、デウォンの過疎村を見学。18:10にカンルンのゲストハウス到着。
・3月10日（金）カンルン（ゲストハウス） International Workshopに参加。9:20に開始。17:35に終了し、ゲストハウスに戻る。シェラブツェ・カレッジによるWelcome Dinnerが催される。
・3月11日（土）カンルン－モンガル 前日と同じくWorkshopに参加。Workshop終了後すぐの15:00にカンルンを出発。20:30にモンガル到着。
・3月12日（日）モンガル－センゴル－ゲルポシン（タシガンホテル） 8:00に出発。12:00にセンゴルで昼食。12:30に出発し西へ向かうも、トゥムシン峠の大雪による通行止めのためセンゴルへ戻る。ブータン南部を通る経路に変更することになり、センゴルを15:15に出発。18:30にゲルポシンに到着。
・3月13日（月）ゲルポシン－ティンティビ 7:05に出発。途中アルナチャールが見えた。9:20にブロッサにて朝食のお菓子を食べる。16:30にガンナムにて昼食兼夕食のパンを購入。22:30にティンティビ到着。
・3月14日（火）ティンティビ－ゲリフ－ティンプー－パロ（HOTEL BTGATSHEL） 5:15に出発。8:20にゲリフ到着。9:20にインド国境ゲートを見学。11:30にダラチューにて昼食。16:20にロベサにて軽食。19:00過ぎにティンプー市内到着。ハンバーガーを食べ、各自お土産を購入。21:30過ぎにパロ到着。
・3月15日（水）B3700便でパロ－バンコク、TG622便でバンコク到着。8:20にタクツァン僧院を眺望。8:40にパロ空港到着。10:35離陸。
・3月16日（木）大阪 6:02到着。

2. 現地を知ること、現地で知ること

京都大学農学部資源生物科3回生 平田二千翔

(1) はじめに

何を隠そう、私が京都大学への進学を志望した一番の理由はフィールドワークへの漠然とした憧れであった。今回のスタディーツアーはそんな憧れをより強くし、今後もフィールドワークを続けたいという確かな意志へと変えた。ブータンという地では気候、地形、植生などの自然環境や農業、宗教、教育、医療など人の暮らしの中の文化、またインドや中国、ネパールなど周辺諸国との歴史までもが深く関わり合っており、それらの密な関係性は現地に身を置くことでしか感じることができないものであったと思う。以下では私が特に興味関心をもつ自然環境の側面から垣間見えたブータンを紹介したい。

(2) 自然の魅力

2月28日午前10時（ブータン時間）、晴天の中パロ国際空港に降り立った私は、空港を囲む山々の迫力に圧倒され、それらの織り成す渓谷美に心を奪われた。パロ・ティンプー間の道路からは比較的見晴らしが良い景色が続き、あまり木々が生い茂っているという印象を受けなかったが、ティンプーを過ぎると環境は一変した。片手には崖の下に森、反対側には岩肌と森という景色がカンルンまで続いた。行程の半分の日数が車移動に費やされる中で、初めはただ何も考えず眺めるだけだった森も、旅を終えるころにはブータンで最も魅力的なものの一つであることを確信していた。

標高の指標となるシャクナゲ、熱帯へ近づくとよく見られるバナナやマンゴーの木、人間の生業と関係の深いソクシンの森や枝のない照葉樹林な

ど木を見るだけでもブータンを知ることができ、森の中から現れるサル、ラングール、シカ、キジやカワセミ、その他多くの鳥類などの野生動物には常に興奮していた。実際にブータンは自然環境の保全に力を入れており、それらを観光資源としても利用している（写真5, 6）。シェムガン県とサルパン県の県境付近で日本人と思われるバードウォッチャーもいた。

(3) 自然の近さ

ソクシンの森はその落葉を集め農地の肥料とし、照葉樹林は枝を切り落とし家畜のまとまった餌としており、森林と人の住む環境は非常に密接している。しかしそれは、そこに住む人々を悩ます問題の要因ともなる。

3月2日12時20分、トンサ村にて昼食を終えた後、建物の階段のすぐ下に何匹かアカゲザルらしきサルがこちらを見ていた。急な出来事であり、初めはその近さに少し驚いたが、後にこれはブータンでよく見られる光景であり、家屋や畑を荒らされる獣害がそこにあることを知った。獣害は日本の山間部も抱える問題ではあるが、ブータンでは宗教上の理由から害獣として動物を殺すことをしないので、より深刻であるように思われた。農地に関して、東ブータンへの道中、綺麗に整えられた棚田をいくつも見たが、牧草地となった耕作放棄地や焼畑を行った後もまた見ることができた。耕作放棄地は、若者の都市への流入による農業の後継者不足が主な原因であり、これもまた日本と共通する大きな問題となっている。焼畑は、殺虫剤や除草剤を使わない有機農業にこだわるブータンの農家にとっては、雑草の処理も楽で栄養も土に送り込めるという伝統的な方法であると思われるが、森林が回復しないうちに焼畑を行い土地の劣化を招く可能性も含んでおり、近代化するブータンにおいてその危険は大いにあるのではないかと思う。

(4) 開発の魅力

現在国土の約70％が森林であるブータンは、街や観光地というものは少なくインフラも十分に整備されていない。そんな中、今回通ったブータンの道で最も快適に車が進んだと思えるのが、帰路で通ったヤンバリ以降のハイウェイの道だった。途中には、ガンラム近郊に突如現れた巨大なセメント工場、町を抜けると眼下に一面に広がるインド・アッサムの森、インドとの国境の町ゲリフ、ゲリフ - サルパン間にはダムを造るためのトンネル工場やブータン唯一の車道のトンネルなどがあった。（写真7）つまりブータン南側の幹線道路沿いではインドとの交易が盛んに行われているため道路もしっかり舗装され、セメント工場やトンネル工場には非常に多くのインドのトラックが集まり、物資を運び出していた。カンルンでシェラブツェ・カレッジとの交流を終え帰路へ着くまで、ブータンの農業には触れる機会が多くあり、工業について絹織物は見たが大規模な工場は見てこなかったので、最後の最後にすごいものを見た、と感動した。特に、それまでの道は山沿いの未舗装の道が多かったので、トンネルを通ったときは終始興奮が収まらず、日本でトンネルを通るときには絶対感じないであろう快適さと便利さを味わった。ティンプーからカンルンまでは2日かかり、さらにその道も土砂崩れや雪でのスリップなどの危険も多くあったので、もしトンネルをもっと造られればどんなに交通状況が良くなり、村と街、街と街がつながりどんなに産業が発達することか、そんな妄想が掻き立てられた。もちろん、トンネル工事には必ず森林の減少が伴い、そこにある美しい自然を壊すことになる。それを分かっていながら、便利さを体感してしまうとその魅力に取りつかれそうになる。このスタディーツアーではブータンの自然の多様性に深く感動したが、最後に産業の開発にも魅力を感じてしまったのが正直な感想でもある。

交流したシェラブツェ・カレッジの学生たちはみな自分のスマートフォンを持ち学校ではパソコンを使っていた。また GNH 村のタホガン村で出会った、決して裕福な生活をしているとは思われない若者でさえスマートフォンを持っていた。グローバル化が進み、海外の情報も簡単に手に入る状況で、現地の若者たちは都市開発についてどう思っているのか。その真意を聞くことはできなかったが、私は今も自然の美しさを大切に守り続けているブータンの人々を深く尊敬せずにはいられない。

(5) インドとの関係

先ほども少し触れたが、ブータンの貿易はほとんどがインドとの交易であり、主な輸出品としてセメント、水力発電による電力が挙げられ、主な輸入品としてガソリンや金属製品、米などが挙げられる。今回の旅で私たち日本人学生は、毎晩その日の印象に残ったことを話し合う場を設けていたが、3月7日の夜、デワタンの大学ゲストハウスでの話し合いには、私たちに同行してくれたシェラブツェ・カレッジの学生の一人も加わった。その日自分は、作物の海外品種を持ち込むことはリスクの伴うことだ、ということを述べたが、それに対して彼は、輸入ばかりに頼るのはとても危険であり、実際インドからチリの輸出を止められたらブータン人は生きていけない、という意見をしてくれた。自国の食文化に欠かせないチリでさえインドに頼り切っている現状はブータン王国の危うさを感じさせた。

(6) さいごに

今回の旅では自分の知識不足、英語力不足、体調管理不足など、多くの至らぬ点を改めて知ることができた。そんな私にかけがえのない知見・経験を与えてくださった引率の2名の先生方、現地で合流した先生方、ガイド・ドライバーなどスタッフの方々、シェラブツェ・カレッジの学生たちや先生方、訪問した各所でお世話になった方々には深く感謝申し上げます。

3. 刺激に満ちた初の海外渡航

京都大学工学部工業化学科2回生　中村将志

今回の study tour は私にとってかけがえのないものであった。その理由は幾つもあるが、一番大きいのは、これが自分にとって初の海外渡航であったということだ。初海外にブータンを選ぶ人はそうそういないのではないだろうか。所属サークルや学部の都合を踏まえ、二回生終わりの春休みが最初で最後の留学のチャンスだと考えた私は、正直どこでもいいから短期留学したいと思い海外渡航プログラムを探した。決してブータンでなければならなかったわけではなかったのだ。見つけた中で唯一参加条件を満たしたものが、このブータン study tour であった。これがこのプログラムとの出会いである。ただ、見つけた瞬間に「これは絶対面白い」と確信していた自分が確かにいた。化学専攻の私にとって、農村・過疎など自身の専攻とかけ離れたタイトルではあったが、迷わず申し込んだ。こうして私は、ブータンはもちろん海外旅行に関する知識はおろか、空港の手続きさえ何も分からない海外旅行初心者としてブータンに渡航することとなった。

多くの日本人はブータンという国に関する知識をほとんど有していないように思う。ただ、ブータンと聞いて唯一連想できるものに、「幸せの国」がある。これは友人達にブータンに行くことを告げた際、ほぼ全員から返ってきた「ああ、それって世界一幸せな国でしょ？」という言葉からも伺える。しかしそれも、実際の所どうかは知らないがどこかで聞いたことがある、といったレベルの認識であることがほとんどだ。渡航前の自分も例外ではない。そんな私が実際にブータンに十数日滞在して強く認識したこと、それはブータン人の英語水準が非常に高いということだ。今回の study tour では帰り道に幸か不幸か悪天候に見舞われ、予定にはなかった南方迂回ルートを通ることになった。そのため、北部を除くブータンの大部分を訪れることができた。東部と西部、町や村ごとに発展状況には大きな差があったのだが、基本的にどこを訪れても、そこにいる人たちと英語でコミュニケーションを取ることができた。これは驚くべきことではないだろうか。

ただ、周囲の人の英語力の高さ故に、私はブータンにいる間ほぼ毎日、自分の英語力の低さに苦しめられ続けた。行程の中では先生方のおかげで、個人旅行では決して訪れることのできないような場所をもたくさん訪ね、とても多くの方々から様々な話を聞くことができた。しかし自分の感覚を表現するには、聞いたという事実が残った、と言った方が正確かもしれない。もちろん、話の途中や終わった後の先生方や他の学生のフォローのおかげで、最低限の理解は得られた。ただ、話を聞きながらその場で自分の考えを持ったり、質問したりということは満足にできなかった。自力では全然聞き取れず理解できなかったからだ。あるいは、聞きたいことがあっても簡単な英単語さえ出てこなかったり、正確に伝わらず噛み合わな

かったりすることが日常茶飯事であったからだ。こうなることは自身の英語力を鑑みても予想の範囲内ではあった。だが、実際にその現実に直面すると、途方もない悔しさともどかしさに襲われた。

ちなみにブータンの国語は英語ではなく、ゾンカ語というチベット由来の言語である。ではなぜ、これほどまでに英語が普及しているのだろうか。それは、なんといっても盛んな英語教育の賜物であろう。しかも、日本の英語教育のように英語を科目として扱うだけではなく、母国語であるゾンカの授業以外は全て英語で教授されている。英語を、物事を考える道具として学んでいるのだ。これは、小中高大、全てのレベルの学校において共通である。私たちは実際に小学校と大学の授業を見ることができた。まず小学校。私も実際に五年生の授業に参加したのだが、扱う単語レベルはもはや日本の高校レベルかそれ以上と言っても過言ではない。知らない単語もちらほら見受けられた。そして何より、生徒の活気がすごい。クラスの半分以上、時にはほぼ全員が「私を当てて！」と言わんばかりの気合の入った挙手をする。恥ずかしがり屋な生徒が多い日本の学校では、なかなか見られない光景である。新出単語を学ぶ際には、その単語が持つ意味や連想できる事柄をひたすら挙げるものや、その単語を含んだ例文を読み、表す内容を絵で描いてみるものなど、ユニークな教育も見られた（写真 8）。単語のもつ様々な意味やイメージをつかみ、深く身に着けることが期待できる良い教え方だと感じた。そして大学。そういった高水準の教育を乗り切って王立大学までたどり着いた学生達は、流石に優秀だった。話す英語はネイティブと遜色ない流暢さを誇る。行程の途中、私たちに一週間付き添ってくれた王立大学シェラブツェ・カレッジの三人の生徒は、日々訪れる様々な歴史的建造物や施設、町、村、道中など至る所で、見たもの聞いたものに関して詳細な補足説明を英語でしてくれた。私たちが投げかける様々な質問にも丁寧に答えてくれた。なぜこんなに詳しいのだろうと疑問に思ったほどだ。私が仮に異国の学生を連れて観光地を回ったとしても、恥ずかしながら日本語でさえそこまで詳しく語ることはできないと思う。

ここで新たな疑問がもう一つ。なぜ国語のゾンカでなく英語中心の教育をする必要があったのか、ということである。日本人の通念からいけば、世界のグローバル化に対応するためという答えがまず出てくるだろう。だが意外なことに、ブータンの英語教育はそれを第一の理由とはしていなかった。まず、ゾンカの文語は 1980 年代から開発が始まったほど歴史が浅い。また、ブータンは多言語国家であり、ゾンカを母語とする国民はブータン総人口の 1/3 以下らしい。加えて、今も昔も教師の大部分をインド人などの外国人に依存している。実際に、訪れたシェラブツェ・カレッジの理系科目の教師のほとんどがインド人だった。ブータンが英語教育を推し進める理由、それはつまり、自国の言語であるゾンカで教育を行うのが技術的・経済的に不可能だからなのだ。仮に技術的な問題が無かったら、ある一つの民族の言語であるゾンカのみで教育を行えるのか。おそらく厳しいだろう。なぜなら、他民族からの反発、ひいては独立運動を誘発することになりかねないからだ。自分の使う言語を否定されることは、自分のアイデンティティを否定されるも同然。ゾンカ以外を母語とする人々が、ゾンカの過度な推進に対して植民地的感覚を抱いてもおかしくない。植民地には独立の機運がつきものだ。ブータン政府がそれを恐れたということも理由の一つだろう。

ただ、ブータン政府は学生の留学を強力に推し進めてはいない。そのため、シェラブツェ・カレッジからは、年に 7 人というごく少人数にしか留学のチャンスが与えられず、それも基本的に一人につき一度きりだ。ブータンは王国ということもあり、海外の国から統治上不利になりうる情報が持ち込まれる危険性や、自国より発展した所へ行った結果、優秀な学生が帰国しなくなる可能性などを考慮した故の冷遇なのだろうか。真相はわからないままだ。いずれにしても流暢な英語を操る優秀な学生が海外経験をできずにくすぶっているのはなんとももったいない現状だと私は感じた。私自身痛感したことなのだが、海外に出てみて初めてわかることは数えきれないほど多くある。その中でも特に有益だったのは、母国日本と異国ブータンを比較することで、より日本のことを知れたということだ。日本あるいは自分の常識といった基準を携えて異国を訪問し、現地での生活を送る中で、日本にありふれた「当たり前」が「当たり

前」でないことに気付き、「当たり前」への感謝と愛おしさを覚えた。ブータンの学生が仮に日本へ来て何を思うか私には想像しかねるが、ブータンにいる間は気づかない何かに気付けることは間違いない。そうした経験を有した学生がブータンのリーダーとなっていけば、ブータンの在り方もまた変わっていくのかもしれない。

今はこのような状況だが、数年後にはブータン人が世界に出て活躍している可能性も決してなくはない。またブータン人以外にも世界には英語に堪能でかつ優秀な人材が数多いる。日本人は果たしてそういった人たちと対等に渡り合っていくことは可能なのだろうか。その糸口となる姿を体現していた人が身近にいた。私たち学生をブータンへ連れて行ってくださった教員の一人である、安藤和雄さんだ。安藤さんの話す英語は、私が言える立場ではないのだが、決して特別流暢なものではない。ワークショップ序盤で挨拶を任せられた安藤さんが、詰まりながらも懸命に話される様子を見て、自分事のようにドキドキしたのを今でも鮮明に覚えている。そんな安藤さんのすごいところは、「伝える力」にあると私は思う。ワークショップでの発表に関して、ブータンの先生方のものは確かに流暢ではあったが、どこか淡々としていて、内容があまり響いてこなかった。だが、安藤さんは違った。大胆な身振り手振りを交え、自分の意見とユーモアをふんだんに盛り込んだ発表に、私は引き込まれた。どの発表よりも内容が頭に入ってきて、途中で飽きることもなかった。どんなに素晴らしいことを話していても聞き手に伝わらなければ意味がない。だからこそ、安藤さんの発表を一番見習いたいと感じた。日常生活でも、現地のガイドや学生と時に冗談を交えながら会話する姿、様々な方の話を聞いている時には、質問をするのはもちろん自分の意見を次々に投げかけ、相手と意見を交換し合ったりする姿がよく見受けられた。これは私の理想にとても近い。自分もこのくらい円滑にコミュニケーションがとれれば、という思いに駆られた。海外の人々と対等に渡り合っている日本人は輝いて見えた。

安藤さんは滞在中にこの言葉を残された。「流暢さでは勝てない。内容で勝負せよ。」17日間のstudy tourで、私にとって特に印象に残っている言葉の一つでもある。流暢に喋れればそれに越したことはない。ただ大事なのはそんな表面上のものではなく、自分が何を考え、それをいかに相手に届くように伝えるかである。この言葉で私は言語を扱うということの本質を再確認することができた。「海外に行きたい」「英語を習熟したい」私が大学に入ってから言い続けてきたことだ。ようやくその片方が叶った。だが、もう一方を叶えるのはそう簡単ではないだろう。ただ、今回様々な刺激を受けたことで目指すべき姿が自分の中で具体化し、何がどの程度足りないかが把握できたように思う。先入観に縛られない独自の意見をもつこと。理解の及ばない箇所を把握・整理して的確な質問をすること。初対面の相手にも物怖じせず話しかけられる度胸をもつこと。リスニング力、語彙、会話表現の不足はさることながら、日本にいながらも強化していける、自身が向き合わねばならない課題の存在に気付いた。その達成のためには、失敗して恥をかくこと、他者から否定されることを恐れていてはならない。ブータンの人々は皆積極的だ。前述した小学校の授業中の挙手を見ても分かるように、幼き頃からその気質が養われているのだろう。対照的に、日本人はシャイで周りの目を気にする人が多い。それは決して悪いことばかりではない。だが、私たち学生が社会に出た後は、皆それぞれ様々な形で大胆さや度胸が求められることになるだろう。それは誰しもがぶつかりうる試練である。打ち勝てるかどうかは自分の準備次第だ。また、近い将来もう一度海外に行きたい。その時、今回と同レベルの苦い思いをしていてはダメだ。海外の人とより充実したコミュニケーションがとれる。そして更にワンランク上の課題に苦心できる。そんな未来を実現させるためにも、今回のstudy tourを通して見つけた自分の課題と真摯に向き合っていきたい。

4. 幸せとブータン

京都大学教育学部1回生　阿部梨奈

(1)「ブータン＝幸せの国」

知らぬ間に植え付けられたこのイメージは、渡航前、私の心を躍らせた。ブータンに行くことを告げるたび、実家の家族や友人らからも「幸せを感じてきてね！」と言われた。「幸せの国・ブー

タンに行けば自分も幸せになれる」というのは今思えば実に短絡的な発想だが、そう言われるとそんな気がしてくる。漠然とした期待を胸に、私は日本を飛び立った。

(2) ブータンでの体験

さてパロ空港に到着するなり、眼前に広がるその景色に驚かされた。見渡す限り、山、山、山。人々は皆、民族衣装のキラ・ゴを着ている。道路は信号機などないガタガタの一本道。道中にポツンと露店があったり、高山植物が生い茂っていたり。新鮮で、でもどこか懐かしさを感じさせるブータンの風景に、私はすっかり心を奪われた。

しかしその生活も1週間、2週間と続くにつれ、次第に日本への恋しさを覚えるようになった。日本での便利で快適な生活に早く戻りたい、と感じた。

そんなとき、シェラプツェ大学で1人の学生と出会った。彼は昨年日本を訪れた（本プログラムで交換留学として京都大学に来た）そうで、その経験を聞かせてくれた。

「日本はすごいよ。お風呂もトイレも広くて清潔だし、食事もおいしい。経済的にも発展していて、高層ビルが立ち並ぶ街ではなんでも売っている。でも僕はやっぱり、自然が豊かで、人があったかい、このブータンが好きだ。確かに不便だけれど、日本に住みたいとは思わなかった。僕にとっては、ブータンで暮らすのが幸せなんだ」

彼の言葉には根拠がない。なぜ彼は日本に住みたいと思わないのか。なぜ彼にとっては日本よりブータンで暮らす方が幸せなのか。でも、私には妙にその気持ちが理解できた。今回ブータンを訪れて、ブータンの豊かな自然や人々のあたたかさ、のびのびとした暮らしぶりが私も大好きになった。でも私はブータンに住みたいとは思わなかったし、自分にとっては日本で暮らすことが幸せだと改めて感じた。なぜなのだろう。

幸せとは何か。トイレで桶に水を汲みながら、真水のシャワーを浴びながら、屋外のホースの水で食器を洗いながら、私はずっと考えていた。

ブータン国内では、GNH 向上に向け様々な活動が展開されている。今回の渡航中も、フィールドワークとして GNH 村を見学したり、GNH をテーマとしたワークショップに参加したりして、その活動の実態や意義について考えを深めた。その際も私の頭の中では、「幸せとは何か」という問いが渦巻いていた。ブータンにも最新技術が伝わろうとしている中、地域の伝統文化を残す取り組みは本当に人々の幸せにつながるのだろうか？離村を抑止され、村に残って働く若者たちは、本当に幸せなのだろうか？

(3) ブータンで気づいたこと

今回ブータンへ行き、私は2つのことに気づいた。

1つは、ブータンの掲げる「幸せの国」の意味は、「既に幸せな国」ではなく「幸せを目指している国」だということだ。日本では前者のイメージが強いように感じられるが、実際にブータンを訪れ、ブータンも多くの課題を抱えていることがわかった。政府予算が不足しており、国内のインフラ整備が不十分だ。医療も末端までいきわたっていない。他にも沢山の課題がある。しかしブータンではこれらを踏まえた上で、「国民が幸せになるためにはどのような取り組みが必要か」を国家、地域、学校などあらゆるレベルで考案・実践している。つまりブータンが他国と比べて特異な点は、現状の幸せの度合いではなく、幸せへの積極的なアプローチにあるのだ。

そして2つめに、「幸せ」は普遍的な意味をもたないということだ。一人ひとりの育った環境、これまでの経験、考え方、感じ方、様々な要因が複雑に絡み合って、その人の幸せを作り出す。私にとっての幸せが誰かにとっても幸せであるとは限らないし、誰かにとっての幸せが私にとっても幸せであるとも限らない。人は皆「幸せ」を追い求めて生きているが、その意味は一様ではない。むしろ個人の心の中でさえ、幸せの持つ意味は常に変化し続けているのではないだろうか。「幸せとは何か」に答えはない。それは、その都度自分で意味づけていくものなのだ。

(4) おわりに

こうしてブータンでの体験を思い返していると、様々な記憶が鮮明に蘇ってくる。みんなでブータンの民謡を歌ったり踊ったりしたこと（写真9）、電灯のない村で夜に星がよく見えたこと、無農薬のバナナが美味しかったこと。こんな幸せな瞬間

が、3週間の中で数えきれないほどあった。

……幸せって何だろう。今の私にとっての幸せは、どんな意味をもつだろう。また、考え込んでしまった。

5. ブータンの今

京都大学法学部1回生　高柳志帆

(1) はじめに

多くの日本人はブータンと聞くと、まず「世界一幸せな国」というイメージを思い浮かべるであろう。実際、私も、この国際交流科目に参加する前は、ブータンに対してそのようなイメージしか持っていなかった。よって、この研修は、私にとって、新しい発見の連続であり、自分の視野を広げる絶好の機会であった。私たちは2017年2月27日から3月16日にかけてブータンに滞在し、主に東ブータンにおける農業の現状について学び、国民総幸福量（GNH）の向上に積極的に取り組む村落を訪れるなどして、ブータンの抱える問題について考えた。そこで、これから、このブータン研修で印象に残ったことについて考察も含め述べていきたい。

(2) ブータンにおける幸せとは

ブータンは国民の幸福度が高いことでよく知られている。実際、2005年に行われた国勢調査では、「あなたは今幸せか」という問いに対して、97%が幸福であると答えた。しかしながら、このアンケートは、「非常に幸福（very happy）」「幸福（happy）」「非常に幸福とは言えない（not very happy）」の三択で、中間の選択肢に回答が偏ったのではないかという問題が指摘されている。

私たちは、3月1日にガキ村（写真10）、3月8日にメンチャリ村を訪れた（写真11）。これらの村は、村落の発展のためにGNHの向上を目標として掲げている。GNHはほとんど目に見える成果を生み出すことはできないので、周りから評価を与えることは難しく、本当に有効なのか疑問視されることも多い。しかし、例えばガキ村では茶の栽培やエコツーリズムを通してGNHの向上を目指しつつ、若者が村から流出することを防ぐという具体的な目標を持っている。GNHの向上を最高の目標とすることは抽象的で、その目標が達成されたのかを判断することも難しい。しかし、GNHの向上に加えて、具体的な目標を設定していれば有効な政策になりうると考えられる。

(3) 英語教育

ブータンの学生の英語力は日本の学生と比べると非常に高い水準にまで達している。ただし、日本では国力の向上のために国際社会で活躍できる人材を育てたいという理由で英語教育に力を入れているが、ブータンでは多民族国家であり、様々な言語が存在しているため、英語に統一して教育を行うほうがやりやすいからという理由で英語教育が行われているという相違がある。その上、欧米と昼夜逆転しているという有用な状況にある。例えば、インドのバンガロールは、元々イギリスの植民地であったため高い英語力を有する人が多く、アメリカと協力して24時間連続でITの開発が可能であったために情報通信産業が著しく発展した。ブータンでも同じような国の発展の在り方の可能性があると考えられる。

また、ブータンの学生は留学すべきであると私は感じた。現段階で十分な英語力を持っているが、例えば先ほど述べたIT産業を活発にさせるには理工学についての知識が必要になる。そのような専門的な知識を得るには海外で勉強する必要があり、また、留学すると自分の視野を広げることも可能である。そうすれば、ブータンをこれまで以上に発展させることが可能となるであろう。

しかし、これには留学した学生がブータンに帰り母国の発展のために尽力してくれるかどうかという問題が伴う。つまり、高度で便利な生活を体験してしまうと、母国に帰りたいという思いが薄れてしまうのではないかということである。これは高い英語力を持ち、専門的知識を身に付け、海外でも活躍できるほどの優秀な学生に特に当てはまる。このような問題が現実化しないために、様々な対策を講じるべきであると考えられる。

(4) おわりに

今回のブータン研修では、ブータンの人々との交流を通して、ブータンの少し立ち入った面をも知ることができた。渡航前に抱いていた「世界一

幸せな国」というイメージとはまた別の一面を垣間見ることができ、非常に有意義な研修であったと心から感じている。ブータンは今幸せであるというよりも、ほかのどの国よりも理想の幸せに向かって積極的に前進しようとしている国であり、その点で「幸せな国」であるのだと私は感じた。ブータンで関わったすべての方々、安藤さん、坂本さん、そして今回ともにブータンを経験した参加学生の皆さんに、今一度感謝の意を表したい。

6. 学生と医者の狭間から見たブータン

京都大学医学部 6 回生　柏木真穂

私は医学部医学科 6 回生の医師国家試験終了後に京大のブータンのスタディーツアーに参加した。スタディーツアーという授業形態も初めてだったし、ブータンに行くのももちろん初めてであった。

京大病院はブータン政府と医療の面で提携しており、医師がブータンのティンプーにある病院で医療技術の指導などのために派遣されていた。帰国した医師から聞いた医療費のみならず、インドでの治療となった場合の家族の渡航費まで国が提供するというシステムや国に CT が数台しかないという日本では信じられない話が印象に残っており、いつかブータンに行きたいという思いを持ち続けていた。

実際に行ったブータンはとても素敵な国だったが日本においてよく連想されているような幸せの国という言葉一言で言いあらわせるものでもなかった。医学生と医者のちょうど狭間の立ち位置の目線から見たブータンについて記述する。

(1) ブータンの学生との交流

私たちはブータン王立大学の Sherubtse college の学生たちと交流した。彼らの中にはベジタリアンもいて、交流した女子学生 2 人はどちらも Hb9 台と貧血を認め、国から女子は鉄剤を支給されるという話を聞いた。ある優秀な男子学生は学部のリーダー（President）をしていた。1 年生から 3 年生まで学部の学生のことは把握していると言っていた。「僕は President だから」日本人にはない責任感に驚いた。ブータンは学生の代表や団体メンバーなど頻回に選挙をしていた。そして彼は言った。" We are friends. No sorry, no thank you." 他の学生も友達を私に紹介する時に "He is my brother." 血が繋がっていなくても兄弟といい、家族のように仲良くしている姿に驚いた。彼らは金銭的な問題で留学や海外旅行をすることはとても大変だ。インターネットの活用率は高く facebook の頻回の投稿には驚く。伝統衣装にビーチサンダルや革靴を合わせてインド製のスマートフォンを操る彼らはとても物知りで、ブータンの動植物や地理、王族、政治にとても精通している。私たち日本人と能力で劣るとは思わない。しかし、海外に行かずして得ている知識にはかなり偏りがあるように思われた。ブータンのエリートである Sherubtse college の彼らがこの先、ブータンの政治を担って行くのだと考えると今のうちに海外に出て見える世界を広げて欲しいと願う。

(2) フィールドワークという学問

今回のスタディーツアーではフィールドワークという学習形態を教えていただいた。バスでブータンを何日も移動する間、窓に頭をぶつけながらカメラを構え、メモをとり色々な景色や動植物に注目した。日本のような均質化が進んでいないからこそ土地ごとに特徴を感じることができるのかもしれないが、日本ではそこまで考えて景色を見ることはなかった。エトメト（シャクナゲ）の葉のサイズを比べてみたり松の葉の本数を数えてみたり、そこにあるものから学んで行くことは日々机の上で教科書を広げて勉強している身としては新鮮であった。そもそも教科書に載っている理論も誰かが初めに世界を観察して帰納した情報が載っているのだろう。そう考えればフィールドワークの考え方無くしては世界は進歩しない。なんとか学生のうちにフィールドワークという形態に触れることができたのは貴重な経験であった。

(3) 仏教の発想と医療

ブータンの人々は信仰深い。お年寄りから女子大生まで車の中にも家の中にも仏教信仰を感じさせる。そして仏教の歴史に精通している。聖人の生まれ変わりも信じているし、寺院にも足繁く通う。仏教界から原理主義的な声が強まっているという話も聞いた。Sherubtse college の女子学生が

ベジタリアンである理由も仏教の不殺生の理念から僧が大衆に肉魚食を控えるよう指導しているからだという。宗教により貧血などの不健康状態が生じているのは悲しい。しかし、仏教のいいことをすれば来世で幸せになれるという考え方は助け合いの精神にもつながっている。ブータンの医療費無料などの手厚い医療体制はその精神を元にしているのではないだろうか。

(4) 伝統医学と西洋医学

ブータンでは伝統医学と西洋医学が共存していた。皆、どちらも馬鹿にしていない。敬意を持ち、自分の受ける医療を選んでいる。家族の中で祖父母は昔からなれ親しみ副作用が少ないと感じられる伝統医学、子供は素早く効果を発揮する西洋医学を受けるという学生がいた。一方、歳をとり持病が増え、病気が深刻になっていく祖父母は西洋医学を、元気で回復する力を持っている自分はそれを緩やかにサポートしてもらう伝統医学を受けるという学生もいた。六人の学生にどちらを選ぶか聞いて見たところ、西洋医学が五人、伝統医学が一人であった。伝統医学のイメージは緩やかに効果を発揮する、お祈りなどの気持ちも大切、副作用がないというイメージを持つ学生が多かった。伝統医学の薬は粒が大きく、飲み込むのが大変だから西洋医学を受けると言った学生もいた。西洋医学の薬は100%海外輸入、伝統医学に用いられる薬用植物は半分以上、国産だという。それならば国の戦略として伝統医学を勧める方が輸入費がかからず国益に繋がるのではないかと思ったが実際には植物は稀少なものも多く、人力で危険な場所に取りに行くのは大変であり、化学物質から大量生産できる西洋薬とは違うそうだ。今のように自由意志のもと、伝統医学に西洋医学ほど患者がいないバランスがちょうど良いのだ。西洋医学が中心となり、その中に漢方が少し組み込まれている日本の医療体制に慣れた私はいつの日か、どちらの医学にも対応できる医者ができるといいと思ってしまう。現在、ブータンで西洋医学の医師になるには海外の医学部で教育を受けるしかない。伝統医学の教育機関はティンプーに1箇所だけ存在する。どちらの医学にも精通した医者が生まれるにはブータン国内に西洋医学の教育機関ができることが必要であろう。いつかブータン国内で医師を養成できる手伝いをしたい。

(5) 医療費と医療アクセス

衝撃が大きいので繰り返して書いてしまうがブータンは医療費が無料である。消費税があるわけではない。理想のシステムである。しかし、ブータン滞在中、医療アクセスの現実を垣間見るエピソードがあった。ブータンの整備が不十分な山道で車の事故が起きたが救急車が近くの病院に搬送するのに30分、近くの病院では必要な治療が提供しきれず、さらに1時間かけて遠くの病院まで運ばれていった。ドクターヘリは存在するが手続きが煩雑で実際には使用するのはとても難しいそうだ。医療費が無料である反面、最低限度の医療体制しか作ることができず、このような医療アクセスの悪さが生じている。国力が足りないから国民が医療費を払う余裕もなく、国にも医療体制を万全に整える余裕がない。医療費が無料という夢のような事実の裏には悲しい現実があった。

この文章を書き上げている今、私は晴れて研修医となった。ブータンから帰国した翌日、医師国家試験の合格がわかった。ブータンの医療体制を知ってから日本で医師となり、日本の医療資源の豊富さに驚くと同時に皆がその状況の特殊さに気づくことなく、医療費、医療資源の過剰な投与が行われているようにも感じる。ブータンのように1年分の医療資源を予測して支給され、不足することもあるよりはたくさん用意されており、消費期限がきて新品のまま捨てられる医療資源がある方が安心ではある。しかし、ブータンの必要最低限の医療資源の中で医療を行うしかない、という環境は確実に日本の医師のためになるだろうなとも感じる。今の私の夢は医師としてブータンに行き、医療体制の整備を行うことだ。3週間弱の短い期間であったがブータンのスタディーツアーで多くのことを学んだ。いつか恩返しをしたい。

7. 幸せへの道中

京都大学総合人間学部4回生　門間ゆきの

「幸せへの道中」—これが現地に行って感じたブータンという国だ。物質的豊かさや経済成長という世界の標準的な価値観に流されることなく、

自分たちは何を幸せとするのか、大切なものは何か、と見据えるブータンの姿勢は、自分は、地域は、日本は、と幸せや生き方を足元から考えさせてくれた。本稿では、ブータンとはどのような国であるのか、ブータンで考えた幸せ、ブータンの課題と私たちの課題について、2017 年 2 月 27 日—3 月 16 日のフィールドワークに基づいて報告する。

(1) ブータンとはどのような国か

ブータンとはどのような国か。「幸せの国」と言われるが、本当なのか。これらは出国前からの問いであった。

ブータンでは、幸せについて二つのレベルで感じることがあった。一つは国民総幸福量 GNH である。これは、物質的豊かさを基準にした世界標準の GDP に対して、心の豊かさに注目した幸せの考え方であり、第 4 代国王ジグミ・シンゲ・ウォンチュック陛下が 1970 年代に提唱した。公正公平な社会経済の発達、文化的精神的な遺産の保存、環境保護、よき統治を 4 本の柱とし、9 分野 (脚注 1) 33 の指標について国民から聞き取りでデータを集め、把握された課題を政策に生かしている。実際、ブータンでは GNH の考え方が広く浸透していると感じることが多くあった。学生は GNH についてよく説明してくれたし、小学校では職業訓練や外国語の活用など、生きる力を養う実践的な教育がなされていた。

二つ目は、ブータンの人々が「信仰、自然、伝統」を大切にしながら送る日々の暮らしに感じた幸せである。

ブータン人はとても信仰に篤い。パロ空港からティンプー市街地に向かう途中、私たちのバンが砂ぼこりを巻き上げて進む道端で、パロの方向を向いて地面にうつ伏せる人々を見た。ティンプーからパロへ、65 キロの道のりを 3 日間かけて巡礼する人々だ。2 歩進んでは立ち止まり、両手を頭の上、顔の前、胸の前と順に合わせて祈り、膝をついてから体を前に投げ出して地面にうつ伏せに伸びて五体投地する。手で体を支えながら起き上がり、また 2 歩進む。小石と砂の大地に何千回とうつ伏せるため、手にわらじをはめていた（写真 12、13）。

山の中の水辺ではマニ車が回り、小高いところや曲がり角にはチョルテン（仏塔）があった（写真 14）。びっしりと経文が書かれた青、白、赤、緑、黄の旗が木竿に結わえられて青空になびいていた。これらはダルシンと言う（写真 15）。岩壁にはツァツァがひっそりと置かれている（写真 16、17）。これは小さな白い置物で、亡くなった人の冥福を祈り火葬灰と泥を固めて 108 個つくって置く場合と、病気の平癒を祈り、土と麦から歳の数だけ作って置く場合があるそうだ。各家には必ず立派な祈りの部屋があり、お供えの水は毎日取り換えられる。屋根の四隅には厄除けのお守りが吊るされている（写真 18）。

また、ブータン人の暮らしは自然や伝統と結びついている。家は木や石造り、台所には手編みの竹籠があり、マットや衣類はヤクの毛や植物性の繊維から糸を紡いで手織りしていた（写真 19、20、21）。人々は日常的に民族衣装のゴ、キラを着ており（写真 22）、初めて会う人には歓迎の意を込めて白い薄い布を首にかけてくれた。

シェラブツェ大学の学生がレクチャーしてくれたブータン作法の厳格さには驚いた。お辞儀は相手の身分によって方法が細かく異なり、最も敬意を表するときは体を二つ折りにして手を床までつける深い礼をする。食事に呼ばれるときは自前の器や布を持参しそこに食事をいただくなど、普段は冗談好きでおおらかなブータン人も作法をとても重んじる。

時間がかかっても、手間がかかっても、信仰を惜しまず、手を抜かず、自然や伝統に寄り添う暮らし方からは、これが自分たちの幸せである、と人々が誇りを持ち、大切にしていることを感じた。

ブータンはどのような国なのか -「幸せへの道中」の国である、というのが一つの答えになった。それはブータンの国家的な GNH にしろ、人々の日々の暮らしにしろ、“自分たちの幸せ” を明確に持ち、その実現に向けて歩んでいることを感じたからだろう。

(2) ブータンで考えた幸せ

ブータンで過ごし、幸せの考え方や暮らし方に共感しつつも、ブータンを「幸せの国」と言い切ることにはためらいを感じていた。一体なぜだろうか。

山国のブータンでは、インフラの未整備が人々

の移動や安全の妨げになっている。隣町へ行くのにも車で何時間も崖っぷちの道を迂回しなくてはならない（写真23、24）。雪崩でその一歩道が通行止めになると、何日も外との行き来は途絶え、食糧の心配をしなくてはならない。事故に遭ってもすぐに病院に行けるとは限らず、助かるはずの命が助からないこともある。教育や就業の機会は限られ、現地の学生からは「ブータンは狭い。海外で学びたいが機会がない」「若者に仕事がない」と聞いた。

病気になったときに治療を選べること、学問や職業を選べること、自由に行きたいところへ行けること - 私が日本で当然のように享受していた「選択の自由」がブータンでは限られていた。私がブータンの幸せに感じた不満足感とは、この「選択の自由」が限られていることへの不便さや理不尽さであろう。「選択の自由」があるからこそ、生活に安心や安定を感じ、主体的に生き、それに喜びや満足を感じる。これも幸せの大切な要素であると、ブータンに来て気づかされた。

(3) ブータンの課題・私たちの課題

ブータンは、世界の標準に捉われずに、目指す幸せをはっきりと掲げ、それに向かって歩んでいる真っ最中だった。現状を幸せと言い切ることにためらいは感じるものの、ブータンの姿勢には、ほかのどの国にもない、幸せへの強い意欲を感じた。だからこそ、ブータンを「幸せの国」と言うよりも「幸せへの道中」と言うほうがしっくりくると感じた。

1971年に国連に加盟するまで鎖国政策をとってきたブータンだが、現在、そしてこれから先、ますます世界に晒されていくことは避けられない。道路や医療などのインフラを整え、教育や働く機会を拡充して、新しい考え方や生き方を選ぶ自由を保障することが、ブータンの「幸せへの道中」における課題であると考えられる。

翻って、私は、私たちは、日本は、「何への道中」にいるのだろう。

何を幸せとしてどう生きるのかを考え、その実現に向けて歩むブータンの姿勢は、私にとって新鮮で強烈なものだった。美味しいものを食べた、美しい景色を見た…達成した消費活動のひとコマひとコマに楽しみや喜びを感じて生きてきた私に、ブータンは「過去や今ではなく、生涯にわたってあなたにとっての幸せって何？どう生きたいの？」と幸せや生きることの意味を問いかけてくるようだった。

インフラが整い、多くの科学技術や国内外の製品、消費文化に支えられて、私たちはブータンの人々よりも選択の自由のある社会に生きているといえる。そこで、これから何を選び、大切にするのか。時代や世界に縛られず、目指すべき目標や価値を考え直そう。そう思って帰国後の日々を過ごしている。

脚注1. 9分野と質問例は次のようである。これまで2008年、10年、15年に調査が行われた。①心理的幸福感（どのくらいの頻度で穏やかな気持ちになりますか？） ②時間の使い方（睡眠時間）
③地域活力（あなたが問題を抱えている時周りの人からどのくらい助けてもらえますか？） ④文化（1年に何日地域の活動に参加しますか？）
⑤健康（あなたはエイズウィルスがどのようにして感染するか知っていますか？） ⑥教育（あなたは民話の知識をどの程度持っていますか？）
⑦自然環境の多様性（あなたは地域の植物や動物の名前を知っていますか？） ⑧生活水準（家計収入は家族の衣食住を満たしていますか？）
⑨統治（あなたは行政をどの程度信用しますか？）

8. 私が感じたブータン

京都大学医学部1回生　岡和來

パロ空港に着陸し、外に出てみると、目の前に壮大な山々が広がっていた。深い山々の中に空港が立地していると言った方が正しいか。その光景に目を見張った。パロ空港は標高2235mに位置している。私たちが暮らす日本の空港はほとんどが海に面していて、最も標高が高い空港で長野県松本空港の658mだ。その差は歴然。日本は山国と言われているが、桁違いだった。ブータンこそが真の山国である。ブータンの人々は山とともに暮らしている。それは家や寺院の立地を見ても明らかだった。それらは山々を切り開いて建てられているのではなく、山の形に合わせて建てられて

いた。標高が高い上勾配も急なため、山を切り開くのは現実的に不可能なのだろう。そのため、建物が崖に沿って建っていることもしばしばで、見ているだけで冷や冷やした。この地で暮らしていけるなんて、人間とはなんとたくましい生き物であろうか、、、。

空港に着いた私たちは、ガイドのカルマ（カルマはゾンカ語で“星”という意味らしい）とドライバーのラッパさんと合流し、都市ティンプーに向かった。途中、地面を這って進んでいるおじさんを見かけた。“チャンツェ”という宗教行為らしい。ティンプーからパロまで車で一時間のところを三日間かけて移動する。ブータンにいる間、チャンツェをしている人を何人も見かけた。ブータンの人々は宗教心が非常に篤い。これはブータンで過ごした二週間の間、私が一番強く感じたことである。少し車を走らせただけでも、いくつもの宗教建造物が見られた。一番面白いな、と思ったのは、“マニ水車”というものだ。ブータンの寺院（チョルテン）には、マニ車という経文が書かれた筒状の建造物があり、三周回すことでお経を唱えるのと同じ効果が得られるとされている。マニ水車は道路沿いに設置されているもので、川の水の流れを利用してマニ車を回すのである（写真 25）。自然の力までも利用する心意気に感心した。また、信仰心の篤い人々は、僧の言う事をとても素直に聞く。最近若者の間でベジタリアン志向が進んでいるのも、GNH 村でアルコール中毒だった人たちがきっぱりと飲酒をやめられたのも、僧の発言力によるものらしい。その他にも、高齢者を非常に敬っていたり、動物に対する深い思いやりがあったりする（畑を荒らした動物を殺すことも禁止なのだ！）など、仏教が深く浸透しているからこそ見受けられる素晴らしい点が数多くあった。僧の意見を鵜呑みにしかねないという不安も少し感じたが、、、。仏教国という観点で興味深かったのは、ブータンで売られている肉はインド人が処理しているということだ。熱心な仏教国であるブータンでは、動物の殺傷が禁止されているからだ。よって、肉類は逆輸入の形を取っているらしい。ここまでするのかと驚いた。

ブータン初日に医学部の学生二人の希望でティンプーの病院を見学させてもらった。病院の外に、青い顔をした薬師如来像が建っていた。青い顔には、患者さんの病気の身代わり、という意味が込められているらしい。ここでも仏様が力を発揮しているようだ。ここで働く日本人医師の方に少しインタビューをさせてもらい、診療費無償化の制度を知った。一見素晴らしい制度だが、薬のオーバーユーズなど弊害も数多くあるようだ。また、伝統医療の薬の 20％、西洋医療の薬のすべてをインドに頼っていることも不安材料である。ブータンは教育費もタダらしいが、これらはほぼインドからの補助金で賄われている。もっと言えば、ブータン自体が国の基盤の大部分を外国に依存しているといっても過言ではない。橋や道路はほぼすべてインドや日本からの援助である。食材売り場を見てみても、野菜や果物は自国で採れたものがほとんどだったが、飲料水や菓子類などはインドやタイ、シンガポールなどからの輸入が大部分を占めていた。ブータンは国策の一つに“sustainability”を掲げているが、まだまだ道のりは長そうだ。

ブータンで一番大変だったのは車での移動だ。ブータンには基本的にトンネルはない。なので、いちいち峠を越えていかなければならない。一日がかりで移動することもあった。今回の旅の最高峰トゥムシン峠（3750m）を通過した日の夜には、学生の多くが高山病になり体調を崩した。私も高熱を出した。また、ブータンの山は標高が高く、気候の振れ幅がとても大きかった。さっきまで沖縄のような気候だったのに気づいたら外は雪、なんて事もしばしば。植生もガラッと変わった。そして移動の際に何よりも怖かったのが、道路にガードレールがないということだ。一歩間違えると奈落の底、、、。年に数名死者も出ているらしい。毎回峠を越える度に、どうか落ちないようにと心から祈っていた。道も悪く、道路のあちらこちらで工事をしていた。トタンでその場限りの粗末な小屋を建て、働いているのはインド人だった。女性も沢山いた。学校があるはずの時間帯だというのに子供がたくさん駆け回っていた。インド人労働者の子供は基本的に学校には行かない。この子たちも将来は両親のようにブータンで肉体労働をするのだろうか、他に選択肢はあるのだろうかと少し悲しくなった。

肝心の食事はというと、これでもかというほど辛かった。みんな直ぐにギブアップして、ひたす

らオレンジとバナナを食べていた。ブータンは内陸国で、様々な国に囲まれているため、味付けもバラエティーに富んだものかと思いきや、そういうわけではなかった。険しい山々から成るブータンでは、それほど異文化交流がなかったのかもしれない。内陸国のイメージが覆された。

今回の旅のメインは、GNH村の訪問だった。日本と同じように、ブータンでも村から都市への若者流出が社会問題になっている。GNH村とは、その対策として進められているプロジェクトで、村の中で若者に職を与え、村に留まってもらおうというものだ。今回色んなGNH村を見せてもらった。その中でも一番印象深いのは、タホガン村である。そこでは、学校の授業についていけずドロップアウトしてしまった中学生や高校生4，5人がお茶の加工をしていた。このお茶はお土産として空港などで売られるそうだ。役所の人たちが技術指導しているらしい。辺鄙な田舎で暮らす彼らだが、私たちと同じように普通にスマホを持っていた。だから都市の情報は彼らのもとに届いているはずだ。同世代として、都市には憧れないのか、と純粋な疑問を持った。村人、特に若い人達が都市を一度でも目にしたとき、果たして自分たちの故郷に絶対的な価値を見出せるのか、というのははなはだ疑わしいと思う。普段日本で生活している私でも、約二週間をブータンの農村地域で過ごした後に、ティンプーの街並みを目にしたとき、ティンプーは農村地域に比べてなんて魅力的な場所なんだと胸を打たれた。現地の子たちはなおさらそう思うんだろうな、と感じざるを得ない。先ほども述べたように農村地域の子の殆どがスマートフォンを持つ今の時代に、都市の情報を制限するのは不可能で、直接にしろ間接にしろ、若者はいずれ都市という近代的な世界を知ることになる。そんな時、若者の都市流出を食い止められるだけの魅力を農村地域が持ち合わせていなければ、もしくは若者が、このまま留まっていたいと思うほどの魅力を自身の故郷に感じなければ過疎化は進む一方である。過疎化を防ぐは、小さい時から、自分の故郷に誇りを持たせるような教育をする必要があると思う。その場しのぎではなく、長年かけての刷り込みが大事だと感じた。いずれにせよ、すぐに解決できる問題では決してなく、長い目を持って気長にやっていく他ないのかもしれない。

9. おわりに―雪―

京都大学東南アジア地域研究研究所（准教授）
坂本龍太

(1) 前年度のモンスーンによる地すべり

平成28年度のILASセミナー「ブータンの農村に学ぶ発展のあり方」は、平成29年2月28日～3月15日ブータンに渡航した。昨年度の同科目では、平成27年8月30日～9月10日に渡航し、問題となったのは雨であった[1]。我々が空港からブータン王立大学シェラブツェ・カレッジへ向かう際に通常用いるルートの大部分がモンスーン気候に区分され、6月後半から9月後半の期間に年間降雨量の6～9割をもたらすと推計されている[2]。10月では学生の参加が難しく、特に雨量が多いとされる7月、8月を避けて9月に渡航したわけであるが、結果的にモンスーンにつかまり、タシガンからカンルンに向かう途中、ブータン王立大学シェラブツェ・カレッジの直前で我々の2台のバスのうち1台がぬかるんだ道にはまり、暗闇の中、1時間ほど立ち往生してしまった。さらに、東部モンガルから中部ブムタンに帰る途中センゴル付近の道路で地すべりによる通行止めのため3時間ほど立ち往生になった（写真26）。我々が通過した後に、同じ所で再び地すべりが起こり、その後数日間通行止めになったことを伝え聞いた。モンスーンを考慮して西への復路を1日早めたのだが、もしその決断をしていなかったら、地すべりに巻き込まれる危険もあった。その年は9月の中旬から下旬にかけても雨による地すべりが多発した。平成27年度の反省を踏まえて、平成28年度はモンスーンに巻き込まれる危険を回避するために、夏休み期間中から春休み期間中に渡航時期を変更することにした。冬季は路面が凍る危険性があるが、3月上旬であれば、モンスーンにつかまるよりは危険性が低いと判断したのである[3]。

(2) 大雪による道路閉鎖

そんな我々が遭遇したのは、時期外れの記録的な大雪であった。2月28日から3月2日にかけて西部から東部への往路は何とか通れたが、復路

の途上、3 月 11 日に厚い雪がブータンを覆った。全国紙 KUENSEL はこう報じている。"Country sees heaviest snow in more than a decade（国に十年に一度の大雪）" 北部ガサ 11.4 インチ、西部ハ 8.7 インチ、首都ティンプー 7 インチ、中部ブムタン 1.8 インチの積雪があったとのことである[4]。同紙は国立水文気象予報センターのタイバ・ブッダ・タマン氏の言葉を引用し、2013 年記録開始以降ティンプーに降った最大の大雪で、過去の十年で最大であろうとし、地中海からの湿気を含む偏西風による Western Disturbance（西方擾乱）が原因としている。今年の西方擾乱は例年より強かったことに加え、アラビア海からの湿気も加わったため大雪となったという[4]。

ブータンでは降雪は吉兆とされ、初雪の際には祝日となる。この初雪による祝日は平成 28 年には 1 月 20 日であったのに対し、平成 29 年は 3 月 11 日となり、前年に比べ一か月半以上遅い祝日となった[5]。Facebook 上では、雪だるまや雪合戦を楽しむ友人たちの投稿が目立ったが、帰路にいる我々にとっては厄介な面があった。路面凍結の危険性という意味では最大の難所の一つ、標高 3750 メートルのトゥムシン峠が我々の前に立ち塞がったのである。3 月 11 日の夜は東部モンガルで宿泊し、3 月 12 日朝ホテルを発った。標高 1600 メートルほどのモンガルは晴れていたが、センゴルあたりではもう路面が凍っており、峠へ向かって標高が上がるに連れて、降雪が激しさを増していった（写真 27）。温暖な地から数時間登ると、そこは一面の雪景色だった。ヒマラヤ山脈南面に位置し、南北およそ 175km の間で標高が数メートルから 7000 メートルまでの違いを持つブータンならではと言えるかもしれない[3]。雪に阻まれ車が前に進まなくなってしまった。来た道をスリップに気をつけながらバックで引き返し、何とか方向を変えて、標高 3050 メートルのセンゴルまで引き返した。一時、このセンゴルの食堂で一泊し、翌日またトライするという案で固まりそうになった。

しかし、この案で不安な点は、いつトゥムシン峠を通れるようになるのかわからないこと、加えて、その後、センゴルからモンガルへ戻ることすらできなくなる可能性があったことである。天気予報によれば翌日以降回復の見込みはなかった。そして、センゴルからモンガルの間には、事故や地すべりの多発地帯ナムリン崖がある[2]。その日の時点ではセンゴルからモンガルまで戻れる道路状況であったが、このまま雪が降り続ければ、センゴルからモンガルまで戻ることさえできなくなってしまうのではないか。さらに心配だったのは、学生の一人が傾眠傾向を来していたことである。ブータン滞在中、同じ生徒が標高 3520 メートルのメラへ訪問した際に同様の症状を来し、標高を下げると改善をみており、急性高山病を疑った。メンバーの安全を考えれば、標高 3050 メートルのセンゴルで閉じ込められるよりは、引き返し、たとえ帰国日が遅れることになったとしても標高を下げる必要があるのではないか。

(3) ブータン国内の南部を通る迂回路

運転手の意見も「このまま雪が降れば戻ることも難しくなる。」というものであった。再度話合い、電話にてカウンターパートであるブータン王立大学シェラブツェ・カレッジの教員や旧友であるローメンツアーズのカルチュン・ワンチュク氏にも相談した。そして、最終的に引き返すという決断を下した。インドを通るルートがあるが、ブータンの国籍を持たない我々がインドに入国するためにはインド旅券が必要である。カウンターパートからインド旅券の入手可能性を探ってもらったが容易ではなさそうであった。そんな中、カルチュン・ワンチュク氏からのベルが鳴った。インドに出なくてもモンガルからブータン国内の南部の農道を通ってゲレフに抜けるルートが存在する、という情報を探り当ててくれたのだ。実際にそのルートを使用してティンプーに戻ったというカルチュン氏の友人に取り次いでもらうことができた。その迂回路とは、ゲルポシン（Gyelpoizhing）からパンバン（Panbang）、ティンティビ（Tingtibi）を通り、ゲレフに抜けるルートであった。我々はその迂回路に望みをかけて、来た道を戻り、モンガル県ゲルポシンに宿泊した。3 月 13 日朝、運転手は峠を指差しこう言った。「昨夜も雪が続いた。あの雲を見ろ。今もきっと雪だ。あの時あのままセンゴルに留まっていたら、今頃戻ってくることさえノーチャンスだった。」

3 月 13 日朝 7 時過ぎにゲルポシンを発ち、ティンティビに到着したのは 22 時半であり、すでに

町の大半の家は寝静まっているようであったが、灯りがともる建物を見つけた。中でお酒を飲んでビリヤードを楽しんでいた若者に、繰り返し、繰り返し、頼み込んで、その建物の中で雑魚寝をした。3月14日5時20分にティンティビを発ち、我々は何とか出発前日の夜にパロまで到着することができた。

ぞっとしたのは3月15日20時21分にタイのスワンナプーム空港のラウンジで携帯電話をいじっていたときのことである。ブータンの道路安全交通局から7時間前に投稿された次の記事に目が釘付けとなった。"Thrumshingla Road is now open for Traffic. Be aware of Ice and Drive Safe.（今、トゥムシン峠が開通しました。道路の凍結に注意して、安全運転を心がけてください。）" 投稿を時系列で追う限り、トゥムシン峠は我々が引き返してからタイまで帰ってきたその日の昼まで、ずっと閉鎖されていたのである。安藤さんに画面を見せて、二人でしばし顔を見合わせた。温かいコーヒーを飲み、ほっと胸をなで下ろした。

参考文献

1) 安藤和雄、西本恵子、出屋敷綾音、福嶋千紘、犬飼亜実、田中咲妃、新川広樹、横畠尚貴、高浦雄大、浅井薫、吉野月華、坂本龍太．実践哲学を基礎とした東ブータンにおける相互啓発実践型地域研究の試み―京都大学国際交流科目「ブータンの農村に学ぶ発展の在り方」現地スタディーツアー2015年度報告集―．ヒマラヤ学誌 2016; 17: 39-76.
2) Dunning SA, Massey CI, Rosser NJ. Structural and geomorphological features of landslides in the Bhutan Himalaya derived from Terrestrial Laser Scanning. Geomorphology 2009; 103: 17-29.
3) Deo Rj Gurung, et al. Monitoring of seasonal snow cover in Bhutan using remote sensing technique. Current Science 2011; 101: 1364-1370.
4) Dechen Tshomo. Country sees heaviest snow in more than a decade. KUENSEL March 13, 2017.
5) First snowfall, Holiday declared for Thimphu. KUENSEL January 20, 2016.

写真 1　トゥムシン峠での記念写真

写真 2　棚田の村

写真 3　荒れた森と沈丁花

写真 4　Monpa 犂

写真 5　幹線道路でよく見られる看板

写真 6　パロ空港内に飾られたブータンの生物多様性を示すイラスト

写真 7　ブータン唯一の車道トンネル

写真 8　英語で学ぶ小学生

写真 9　皆で踊る

写真 10　ガキ村訪問、NGO スタッフの説明を聞く

写真 11　メンチャリ村での記念撮影

写真 12　五体投地をする人

写真 13　五体投地をする人、手には草鞋をはめている

写真 14　チョルテン

写真 15　ダルシン

写真 16　岩陰にツァツァを

写真 17　ツァツァ

写真 18　屋根の角にぶら下がっているのが厄除け（ポー）

写真 19　台所の竹籠類

写真 20　石造りの家

写真 21　機織りは身近な仕事

写真 22　ゴ、キラは日常着

写真 23　崖っぷち

写真 24　山に沿って迂回する道ばかり

写真 25　マニ水車

写真 26　地すべり現場

写真 27　激しく降る雪

謝　辞

本誌公刊にあたっては、京都大学学士山岳会、京都大学「霊長類学・ワイルドライフサイエンス」・リーディング大学院からの助成をうけました。

編集委員

稲村哲也（放送大学）
坂本龍太（京都大学地域研究研究所）
松沢哲郎（京都大学高等研究院）
竹田晋也（京都大学 A・A 地域研究研究科）
松林公蔵（京都大学東南アジア地域研究研究所）*
河合明宣（放送大学群馬学習センター）
月原敏博（福井大学教育地域学部）
奥宮清人（京都大学東南アジア地域研究研究所）*
古川　彰（関西学院大学社会学部）

*：編集責任者

2018 年 3 月 28 日発行

ヒマラヤ学誌　第 19 号

発行者　京都大学ヒマラヤ研究会
京都大学霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院
京都大学ヒマラヤ研究ユニット
〒606-8501　京都市左京区吉田牛ノ宮町
京都大学高等研究院特別教授　松沢哲郎（気付け）
Tel. 075-753-9792　Fax. 075-753-9790
e-mail: matsuzawa.tetsuro.8w@kyoto-u.ac.jp

編集委員会　〒606-8501 京都市左京区吉田下阿達町46
京都大学東南アジア地域研究研究所
松林公蔵（気付け）
Tel. 075-753-7312,　Fax. 075-753-7168
e-mail: kmatsu@cseas.kyoto-u.ac.jp

印刷所　株式会社　土　倉　事　務　所
〒603-8148 京都市北区小山西花池町1-8
Tel. 075-451-4844,　Fax. 075-441-0436
e-mail: jde07711@nifty.com